



喜寿の標よかはたれの石路の花
 長汀に寄する寒涛吾が一世
 書出しは短文がよし石路の花
 飼ひ慣らす老いのじやじや馬冬薔薇
 戦場に墜ちたる冬の鳥あまた
 選炭婦の手拭ひ真白鶏頭花
 やはらかくなりて犬死す初氷
 敷皮になりて小さき熊の貌
 美少年兎を抱いて寝るといふ
 母の忌のこの冬麗を母と思ふ
 一生を道化に遊すまみ北狐
 黄落や地べたに座ることが好き
 母夢に出て来よ今宵鰻大根

*

音消えしたそがれどきを枯葉掃く
 卒論を終へし朝初雪を踏む

奥山源丘
 塚原白里
 栗原利代子
 宮地良彦
 矢島 恵
 後藤行雄
 上村敦子
 折井眞琴
 齐藤すみれ
 沼井由紀枝
 北見弟花
 牧野きよ子
 高橋良子
 山本正子
 牧野 繭

しもつかれ野州の血筋確と継ぎ
 初霜や微音纏へる石の塊
 おでん酒ゆるりと時の過ぎゆけり
 古井戸の水の尖りや憂国忌
 噴井戸に若水溢れ恵みあれ
 雪吊を吊りて半生まだ青春
 鹿寄せにベートーヴェンの田園を
 山の口開く日の父のリヤカーに
 悲しみを集めては捨て日記買ふ
 茸狩娘に城をひとつつつ
 菊人形盛りを過ぎて末枯れず

*

街路樹に始まる冬の物語
 寒鯉や跳ねし水面のすぐ閉じる
 炬燵ねこ心が寒いなどと謂ひ
 陸奥湾をまると抱いて冬に入る

高橋洋子
 一志貴美子
 下島 健
 吉池史江
 土屋 隆
 丸山貴史
 吉澤 清
 林 節子
 河西 将
 鈴木美代子
 池田康樹
 徳丸昭広
 青木山彦
 添田朋子
 宇内久子

岳俳句の現在 二月 (498)

—— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

巻頭寸言。一月二十日が大寒。暦では十二日ほど経て、二月二日に節分を迎え寒明け、翌日は立春となる。ところが世界はいよいよコロナ重圧で空気が淀むばかりではない、人に對しても疑心暗鬼。精神衛生の上からは悲惨な状況である。こんな時に、わずかにことばの世界、俳句が救いになるか。

老いのじやじや馬を飼ひ慣らす術

飼ひ慣らす老いのじやじや馬冬薔薇 宮地 良彦

九十五歳。月二回の小句会に皆勤。自宅から三十分ほど歩いて見える。見事である。一戸建住居に住み、仄聞では週二回ほどお手伝いに依頼する他はご本人が食事一切を仕切るとか。往年テニスで鍛えられた体力があり、物理学者の頭脳は明晰。ご本人がまさに「冬薔薇」。老いを「飼ひ慣らす」術を知りたい。

喜寿の標よかはたれの石路の花 奥山 源丘

石路の花が好きな私は同感した。清冽な夜明けの石路。身が痺れるではないか。いまだ人生は途上。これからこれから。

書出しは短文がよし石路の花 栗原利代子

ナルシズムが生きて甲斐となることも。ああ、すみれ調。元気を出し生きよ。

母の忌のこの冬麗を母と思ふ 沼井由紀枝

母を亡くした後は空気が母。この柔らかい感じ。母は微塵になって私を包んでくれる。そう思うことで気持ちが休まる。母の存在は永遠に空気なのであろう。「冬麗」が抜群だ。

一生を道化に遊び北狐 北見 弟花

俳句真開眼（こんなことばはどうか）。「遊び」が巧い。俳誌「樹氷」代表。弟花先生は九十二歳の「北狐」。北見在住。「岳」を慕い、水を得た魚さながら。ますます勉強という志が凄い。

黄落や地べたに座ることが好き 牧野きよ子

今月の秀句

長汀に寄する寒涛吾が一世 塚原 白里

岳集には（永らへて道を失ふ枯野かな）がある。ドキッとした。掲句「長汀」の句にしても道を明快に指してはいない。寒涛の繰り返しに「吾が一世」を見ている。先に望みがあるくらいのはまだ甘いという。いまをいかに生きるか。これだけだ。九十三歳の白里さんが築いた人生観。私はそこに感動した。気持ちに率直だ。

これは文章講座の大事なコツ。そこに花石路の気品が出る。戦場に墜ちたる冬の鳥あまた 矢島 恵

美しいものの、素早いもの。戦争は人類の素晴らしい財産をダメにする。「冬の鳥」は象徴であらう。幾多の大戦のたびに喪失が大きかった人類はもう疲労困憊だ。しずかな至言。

選炭婦の手拭ひ真白鶏頭花 後藤 行雄

六〇年代安保の時代、三池炭鉱の労働者宿舎でその子供達の勉強を見たという黒田杏子と話をした。ただ今、選炭婦は珍しい句材。しかし、私には未だ新鮮だ。私の感覚が六〇年代安保以来深化（進化ではない）しないということか。作者も。

やはらかくなりて犬死す初氷 上村 敦子

ぎくつとした。犬であっても「死」を見つめて深く、鮮烈。

敷皮になりて小さき熊の貌 折井 眞琴

熊あわれ。貌が大事。こんなに小さくなって。熊皮を欲しがる人間は残酷。尻に敷きのうのうと「おい酒だー」。

美少年兎を抱いて寝るといふ 斉藤すみれ

生きる性根が座っている。ひらめきはそこから。南砺市井波句会は女性男性多士済々。その中でも手堅い作者。二十代新鋭の輩出もあり、久保美智子傘下、コロナを吹き飛ばせ。

母夢に出て来よ今宵鰯大根 高橋 良子

期待がようやく本物になるか。母への呼び掛けは「鰯大根」を用意してからという。この土俗、この世話好き。実に楽しい。

他に同人作品から推薦候補作をあげる。

風はみな音となりたる枯はちす 岩井かりん
落鷹を愛づる齡となりゐたり 眞榮城いさを
産土や武蔵鐙の実の真つ赤 宮岡 光子
怒らねば濁世に負ける冬の虹 大澤 淳基
裸木となれる被爆樹爆心地 小谷 一夫
日向ぼこぼんやりといふ詩の囊 鎌田 文子

卒論を終へし朝の懐かしさ

卒論を終へし朝初雪を踏む 牧野 繭

初々しい。この新鮮さ。もうこんな日は来ないと思うと、人生は短いと思う。徹夜して、出ると初雪。多分身長は十センチ伸びた気分だ。脳味噌が詰まった感じ。感謝したい感じ。「卒論」の語のひびき。世界は拓く。もう一度いうが、初々しいねえ。

しもつかれ野州の血筋確と継ぎ 高橋 洋子

「しもつかれ」は初午の日に食べる下野（栃木）の郷土料理。いわばごった煮。節分に撒き残しの豆と正月食べ残りの塩麴の頭、そこに大根や人参を摺りおろし、油揚げも入れ、酒、醤油、塩少々。小一時間煮ると出来上がり。これが北関東名物「しもつかれ」。わかりました、お静かにといった調子。

初霜や微音纏へる石の塊 一志貴美子

静かな冬の音が聞える。初霜の頃に感知した鋭さは、作者がしばらく病に苦しんだ体験から微妙さに気づいたものか。格調もあり、見えない石の深部への想像に冴えがある。

今月の秀句

音消えしたそがれどきを枯葉掃く 山本 正子

音感がいい、鮮烈な作者。「音消えし」にはっとした。世は無音（無韻ではない）のたそがれ。枯葉を掃く。枯葉とはなに？ とても思いつながら。どこか異国で名演奏でも聴いて来たものか。その余響が身体どこかにある。無韻にひたりながら。へうつろふや枯葉の記す大譜面》にも注目した。これを鑑賞したいのだが、私は音楽のセンスがないので残念です。

山の口開く日の父のリヤカーに 林 節子

「山の口開く」とは、新年ではない。信州辺では十二月一日。山入りの解禁日。集落共有地の柴を刈り、ぼや炭を焼く。掲句はリヤカーを曳く父につき、山へ入った記憶を詠む。珍しい句。

悲しみを集めては捨て日記買ふ 河西 将

日記が悲しみの捨てどころだという。にも関わらず、年末には日記を買う。達観した境地を覗かせる。そこに惹かれる。

茸狩娘に城をひとつつつ 鈴木美代子

娘に残すものとして何もない。せめて茸の城でも。山国人の気持ちも豊かだが、山野はとうもなく豊か。

菊人形盛りを過ぎて末枯れず 池田 康樹

原句は「菊人形盛りを過ぎて末枯れし」。どこが面白いの

今月の秀句

寒鯉や跳ねし水面のすぐ閉じる 青木 山彦

水面の僅かな変化も見落とさない。「すぐ閉じる」がそれ。いかにも寒。寒中も稽古は怠らず、寒鯉も役者だ。眼力がある。俳句修練を重ねた作者である。山好きをペンネームに。

おでん酒ゆるりと時の過ぎゆけり 下島 健

のびやかな時間。仰山にもならず淡々と鄙びた酒を楽しむ気持が捉えられ、さりげない巧みがある。句柄にも温厚な人柄が滲む。「岳」塩尻支部の新たなまとめ役に就かれた由。

古井戸の水の尖りや憂国忌 吉池 史江

おどろおどろしさがある。いまだ使われている井戸か。

噴井戸に若水溢れ恵みあれ 土屋 隆

回想句か。作者の郷里松本の家には盛んな噴井があった。少年時代、私も類似の清水で育った。新春には「若水」と呼ばれる。ことばが普段の水をきらめかす。水こそ永遠。掲句は心の水へ呼び掛けている。着想に光がある。元氣が出よう。

雪吊を吊りて半生まだ青春 丸山 貴史

作者との出会いからも、長くなった。専門は地味な建築設備企画の設計者。その上に備前焼への挑戦や歌謡曲歌手など職人芸への志が高く、ひたむきな好青年。雪国の深部へ身を埋め、まだ青春とは羨ましい。奥方公子さんもぐいぐいと「岳」の諸実務の推進役。ともにまだ青春。コロナ禍を飛ばす幸あれ。

鹿寄せにベーターヴェンの田園を 吉澤 清

着想が斬新。そののびやかさ、大らかさに奈良公園辺の秋を思いながら、どこか新春のようこびを重ねていた。名句とは。

か、当たり前だ。そこを一字添削。さすがに菊、菊人形の盛りは過ぎたがまだまだ観賞に堪える。これが俳句の醍醐味。熱心この上ない作者であるが、勘所を擲んでいない。よくこの添削を噛みしめてほしい。

青雲集

街路樹に始まる冬の物語 徳丸 昭広

一篇の短編小説になろう。プラタナス・鉄もち・梓の木と。

炬燵ねこ心が寒いなどと謂ひ 添田 朋子

ませた炬燵ねこ？ 飼主への当てつけ？ もっと待遇改善せよとか。世に犬、猫の理解者は多い。皆さんどう理解しますか。

陸奥湾をまるごと抱いて冬に入る 宇内 久子

青森の冬。これはスケールが大きい。その心境やいかん。

他に岳集・青雲集から推薦候補作を掲げる。

劇中の恋人に数く蒲団かな 金子 圭子

わが打ちし面の秋思や恋なかり 金入 智子

大熊を磔のごと縛りけり 竹内八千代

朴落葉婆娑羅婆娑と舞ひにけり 丸山 公子

朝風呂す忘年会は女子四人 遠藤 洋子

藁すぐる香にとつぷりと小六月 神林 利一

推敲・添削 宮坂 静生

○気になる表現

原句 母の味忘れてしまふ根深汁

このような句は実に多い。女性にとり「母の味」は身に蓄えた、生涯慕い続ける貴重な財産には違いない。しかし、「味」とはなかなか人に伝わりにくい。俳句のことばには成り難い。「味」を他の言い方で表現できないか考える。

添削 根深汁母をわすれてをりしかな

原句 鉄音のリズムも軽く冬囲ひ

「リズム」が気になる。当り前に使うことばなので俳句にもと、軽く考えたのであろうが、「リズム」に変わる言い方はないか。「鉄音」を具体的に表現したい。

添削 鉄切る音の軽やか冬囲

○このように推敲し、添削する

▽季語が欲しい

原句 皿を割りコップも割りて幽霊か

加瀬ひろし

添削 皿を割りコップも冬の幽霊か

二つ目の「割り」は省略できる。さらさら。これは冬の幽霊の仕業かと、自分の粗相を棚に上げたもの。

原句 夫の母がみそかに届け物

榊枝あゆ美

添削 大晦日夫の母が届け物

自由に表現していいが、基本の五・七・五のリズムをどこかで踏まえよう。「みそか」は季語ではない。「大晦日」に。

▽簡潔な言い方を工夫する

原句 指輪せぬま指の節神迎

阿部薄荷光

添削 指輪せぬ節神の指神迎

押えるところはきちんとさせる。「指の節」は「節神」が明快。ここは強い言い方であるが、句にめりはりが生れる。

原句 岩を抱く根の聴く音よ露しとど 及川 明子

添削 岩を抱く根の音を聴く露しとど

「根の聴く音」は深い言い方であるが、理解するのはかなり難しい。ここは「根の音を聴く」方が分りやすいのではないか。私が聴くなら分る気がする。どうだろうか。

原句 全快に湯豆腐はさみ笑む二人 佐藤 悦雄

添削 全快に湯豆腐はさむ二人かな

「笑む」が要らない。状況を想像すれば楽しさが分る。

原句 茎石をはずすに要るはタイミング 西村 良子

添削 茎石をはずすに日暮深まりぬ

「タイミング」は要領のいい日常語。詩のことばではない。状況を考えて時間が経ったことへ転じる。これが俳句のコツ。

▽語順、省略、留め方など

原句 置き薬手付かず済む去年今年 原 保次郎

添削 手付かず済む置き薬去年今年

安心感をどう表現するか。添削の方が少し重い言い方。

原句 羽越線背に白鳥群るる田んぼ中 菅原ミヤ子

添削 羽越線白鳥群るる田んぼ中

「背に」は要らない。省くことによってリズムも良くなる。